ひのきとひなげし

宮沢賢治

ひなげしはみんなまっ赤に燃えあがり、めいめい風にぐらぐらゆれて、息もつけないようでした。そのひなげしのうしろの方で、やっぱり風に髪もからだも、いちめんもまれて立ちながら若いひのきが云いました。

「おまえたちはみんなまっ赤な帆船でね、いまがあらしのとこなんだ」

「いやあだ、あたしら、そんな帆船やなんかじゃないわ。せだけ高くてばかあなひのき。」ひなげしどもは、みんないっしょに云いました。

「そして向うに居るのはな、もうみがきたて燃えたての銅づくりのいきものなんだ。」

「いやあだ、お日さま、そんなあかがねなんかじゃないわ。せだけ高くてばかぁなひのき。」ひなげしどもはみんないっしょに叫(さけ)びます。

ところがこのときお日さまは、さっさっさっと大きな呼吸を四五へんついてるり色をした山に入ってしまいました。

風が一そうはげしくなってひのきもまるで青黒馬(あおうま)のしっぽのよう、ひなげしどもはみな熱病にかかったよう、てんでに何かうわごとを、南の風に云ったのですが風はてんから相手にせずどしどしどし向うへかけぬけます。

ひなげしどもはそこですこうししずまりました。東には大きな立派な雲の峰(みね)が少し青ざめて四つならんで立ちました。

いちばん小さいひなげしが、ひとりでこそこそ云いました。

「あぁつまらないつまらない、もう一生合唱手(コーラス)だわ。いちど女王(スター)にしてくれたら、あしたは死んでもいいんだけど。」

となりの黒斑(くろぶち)のはいった花がすぐ引きとって云いました。

「それはもちろんあたしもそうよ。だってスターにな

らなくたってどうせあしたは死ぬんだわ。」
「あら、いくらスターでなくってもあなたの位立派ならもうそれだけで沢山(たくさん)だわ。」
「うそうそ。とてもつまんない。そりゃあたしいくらかあなたよりあたしの方がいいわねえ。わたしもやっぱりそう思ってよ。けどテクラさんどうでしょう。まるで及(およ)びもつかないわ。青いチョッキの虻(あぶ)さんでも黄のだんだらの蜂(はち)めまでみなまっさきにあっちへ行くわ。」
向うの葵(あおい)の花壇(かだん)から悪魔(あくま)が小さな蛙(かえる)にばけて、ベートーベンの着たような青いフロックコートを羽織

りそれに新月よりもけだかいばら娘に仕立てた自分の弟子の手を引いて、大変あわてた風をしてやって来たのです。

「や、道をまちがえたかな。それとも地図が違ってるか。失敗。失敗。はて、一寸聞いて見よう。もしもし、美容術のうちはどっちでしたかね。」

ひなげしはあんまり立派なばらの娘を見、又美容術と聞いたので、みんなドキッとしましたが、誰もはずかしがって返事をしませんでした。悪魔の蛙がばらの娘に云いました。

「ははあ、この辺のひなげしどもはみんなつんぼか何

かだな。それに全然無学だな。」
娘にばけた悪魔の弟子はお口をちょっと三角にしていかにもすなおにうなずきました。
女王（スター）のテクラが、もう非常な勇気で云いました。
「何かご用でいらっしゃいますか。」
「あ、これは。ええ、一寸（ちょっと）おたずねいたしますが、美容院はどちらでしょうか。」
「さあ、あいにくとそういうところ存じませんでございます。一体それがこの近所にでもございましょうか。」
「それはもちろん。現に私のこのむすめなど、前は

尖ったおかしなもんでずいぶん心配しましたがかれこれ三度助手のお方に来ていただいてすっかり術をほどこしましてとにかく今はあなた方ともご交際など願えばねがえるようなわけ、あす紐育に連れてでますのでちょっとお礼に出ましたので。では。」
「あ、一寸。一寸お待ち下さいませ。その美容術の先生はどこへでもご出張なさいますかしら。」
「しましょうな」
「それでは誠になんですがお序での節、こちらへもお廻りねがえませんでしょうか。」
「そう。しかし私はその先生の書生というでもありま

せん。けれども、しかしとにかくそう云いましょう。おい。行こう。さよなら。」

悪魔は娘の手をひいて、向うのどてのかげまで行くと片眼をつぶって云いました。

「お前はこれで帰ってよし。そしてキャベジと鮒とをな灰で煮込んでおいてくれ。ではおれは今度は医者だから。」といいながらすっかり小さな白い鬚の医者にばけました。悪魔の弟子はさっそく大きな雀の形になってぼろんと飛んで行きました。

東の雲のみねはだんだん高く、だんだん白くなって、いまは空の頂上まで届くほどです。

悪魔は急いでひなげしの所へやって参りました。
「ええと、この辺じゃと云われたが、どうも門へ標札（ひょうさつ）も出してないというようなあんばいだ。一寸たずねますが、ひなげしさんたちのおすまいはどの辺ですかな。」
　賢（かしこ）いテクラがドキドキしながら云いました。
「あの、ひなげしは手前どもでございます。どなたでいらっしゃいますか。」
「そう、わしは先刻伯爵（はくしゃく）からご言伝（ことづて）になった医者ですがね。」
「それは失礼いたしました。椅子（いす）もございませんがま

あどうぞこちらへ。そして私共は立派になれましょうか。」

「なりますね。まあ三服でちょっとさっきのむすめぐらいというところ。しかし薬は高いから。」

ひなげしはみんな顔色を変えてためいきをつきました。テクラがたずねました。

「一体どれ位でございましょう。」

「左様。お一人が五ビルです。」

ひなげしはしいんとしてしまいました。お医者の悪魔もあごのひげをひねったまましいんとして空をみあげています。雲のみねはだんだん崩(くず)れてしずかな金い

ろにかがやき、そおっと、北の方へ流れ出しました。

ひなげしはやっぱりしいんとしています。お医者もじっとやっぱりおひげをにぎったきり、花壇の遠くの方などはもうぼんやりと藍いろです。そのとき風が来ましたのでひなげしどもはちょっとざわっとなりました。

お医者もちらっと眼をうごかしたようでしたがまもなくやっぱり前のようしいんと静まり返っています。

その時一番小さいひなげしが、思い切ったように云いました。

「お医者さん。わたくしおあしなんか一文もないのよ。

けども少したてばあたしの頭に亜片ができるのよ。それをみんなあげることにしてはいけなくって。」

「ほう。亜片かね。あんまり間には合わないけれどもとにかくその薬はわしの方では要るんでね。よし。いかにも承知した。証文を書きなさい。」

するとみんながまるで一ぺんに叫びました。

「私もどうかそうお願いいたします。どうか私もそうお願い致します。」

お医者はまるで困ったというように額に皺をよせて考えていましたが、

「仕方ない。よかろう。何もかもみな慈善のためじゃ。

承知した。証文を書きなさい。」

さあ大変だあたし字なんか書けないわとひなげしどもがみんな一諸（いっしょ）に思ったとき悪魔のお医者はもう持って来た鞄（かばん）から印刷にした証書を沢山出しました。そして笑って云いました。

「ではそのわしがこの紙をひとつぱらぱらめくるからみんないっしょにこう云いなさい。

　亜片はみんな差しあげ候（そうろう）と、」

まあよかったとひなげしどもはみんないちどにざわつきました。お医者は立って云いました。

「では」ぱらぱらぱらぱらぱら、

「亜片はみんな差しあげ候。」

「よろしい。早速薬をあげる。一服、二服、三服とな。まずわたしがここで第一服の呪文をうたう。するとここらの空気にな。きらきら赤い波がたつ。それをみんなで呑むんだな。」

悪魔のお医者はとてもふしぎないい声でおかしな歌をやりました。

「まひるの草木と石土を　照らさんことを怠りし赤きひかりは集い来てなすすべしらに漂えよ。」

するとほんとうにそこらのもう浅黄いろになった空気のなかに見えるか見えないような赤い光がかすかな

波になってゆれました。ひなげしどもはじぶんこそいちばん美しくなろうと一生けん命その風を吸いました。

悪魔のお医者はきっと立ってこれを見渡していましたがその光が消えてしまうとまた云いました。

「では第二服　まひるの草木と石土を　照らさんことを怠りし　黄なるひかりは集い来てなすすべしらに漂えよ」

空気へうすい蜜のような色がちらちら波になりました。ひなげしはまた一生けん命です。

「では第三服」とお医者が云おうとしたときでした。

「おおい、お医者や、あんまり変な声を出してくれる

なよ。ここは、セントジョバンニ様のお庭だからな。」
ひのきが高く叫びました。
その時風がザァッとやって来ました。ひのきが高く叫びました。
「こうらにせ医者。まてっ。」
すると医者はたいへんあわてて、まるでのろしのように急に立ちあがって、滅法界もなく大きく黒くなって、途方もない方へ飛んで行ってしまいました。その足さきはまるで釘抜きのように尖り黒い診察鞄もけむりのように消えたのです。
ひなげしはみんなあっけにとられてぽかっとそらを

ながめています。
　ひのきがそこで云いました。
「もう一足でおまえたちみんな頭をばりばり食われるとこだった。」
「それだっていいじゃあないの。おせっかいのひのき」
　もうまっ黒に見えるひなげしどもはみんな怒って云いました。
「そうじゃあないて。おまえたちが青いけし坊主のまんまでがりがり食われてしまったらもう来年はここへは草が生えるだけ、それに第一スターになりたいなん

ておまえたち、スターて何だか知りもしない癖（くせ）に。スターというのはな、本当は天井（てんじょう）のお星さまのことなんだ。そらあすこへもうお出になっている。もすこしたてばそらいちめんにおでましだ。そうそうオールスターキャストというだろう。オールスターキャストというのがつまりそれだ。つまり双子（ふたご）星座様は双子星座様のところにレオーノ様はレオーノ様のところに、ちゃんと定（さだ）まった場所でめいめいのきまった光りようをなさるのがオールスターキャスト、な、ところがありがたいもんでスターになりたいなりたいと云っているおまえたちがそのままそっくりスターでな、おまけ

にオールスターキャストだということになってある。
それはこうだ。聴(き)けよ。
　あめなる花をほしと云い
　この世の星を花という。」
「何を云ってるの。ばかひのき、けし坊主なんかになってあたしら生きていたくないわ。おまけにいまのおかしな声。悪魔のお方のとても足もとにもよりつけないわ。わあい、わあい、おせっかいの、おせっかいの、せい高ひのき」
　けしはやっぱり怒っています。
けれども、もうその顔もみんなまっ黒に見えるので

した。それは雲の峯がみんな崩れて牛みたいな形になり、そらのあちこちに星がぴかぴかしだしたのです。

ひなげしは、みな、しいんとして居(お)りました。

ひのきは、まただまって、夕がたのそらを仰ぎました。

西のそらは今はかがやきを納め、東の雲の峯はだんだん崩れて、そこからもう銀いろの一つ星もまたたき出しました。

底本：「新編　銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社
　　１９８９（平成元）年６月15日発行
　　１９９４（平成６）年６月５日13刷
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年１月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。